

ノーベル賞受賞。スポーツの栄光。既婚男性が大きな業績をあげると、昔も今も、「妻の支え」といったストーリーが語られる。女性活躍の時代も、「内助の功」は不滅なのか。

夫の世話してないけど



古屋 OYA U
60年生まれ。家事や育兒、仕事をしながら日本語教師資格を取得。

あまの
天野 かすみ
香寿美さん 日本語教師

夫の天野浩（名古屋大教授）が2014年にノーベル物理学賞を頂いた時、メディアの取材を受けるたびに「奥様の内助の功ですね」と言われて、とても不思議でした。私は内助の功などした覚えはないんですよ。

賞を受けることができたのは、天野と、まわりの方々の長年にわたる努力があったからです。夫の頑張りが認められたのはうれしかったですね。唯一私がしたのは、研究ざんまいの夫に何も言わなかったことです。

結婚する時、「自分は研究をしているからマイホームパパにはなれない。日曜日も大学へ行く。それでもいいか」と聞かれました。夫婦だからといっていつも一緒にいる必要もないし、お互いにしてほしいことがあるのも当然です。ので、快諾しました。

天野は毎晩遅い時間に疲れて帰宅するので、子どものことを相談しようにも、話せる状態ではありませんでした。なので相談するのはすっぱりあきらめた。ストレスはたまりませんでしたよ。天野は研究が好きでたまらないのだし、子育てはできるほうでしたらいいと思っていたので。実際、育児はとても楽しかったです。

家事は私がほとんどしたけれど、「夫の世話」をしなればならないという発想はないんです。私がお家を空けると「ご主人の世話は大丈夫なんですか？」と、よく聞かれました。「夫は大人です。自分のことは自分でできます」と何度答えたことか。

そのたびに「妻は夫の面倒をみるものだ」という考え方はいまだに深く根付いているんだなあと感じましたね。

女性は低く見られているんだなあ。専業主婦をしている女性は「〇〇さんの奥さん」「〇〇ちゃんのお母さん」と呼ばれることも多い。私も、専業主婦をしていたときは、誰ひとり「天野香寿美さん」と名前では呼んでくれませんでした。それは屈辱でした。

世間は「女性は男性を陰で支えるものだ」という男性優位の古い考え方を定着させ浸透させたいがために、「内助の功」などという古い言葉を持ち出しているんじゃないでしょうか。

夫婦の形はいろいろ。お互いがよければそれでいいのです。「女性はこうあるべきだ」という考え方を一様に押しつけられるのは困ります。

「サザエさん」のような一家に憧れる人もいます。でも、いつもそうだと疲れてしまう人もいます。みんなが同じである必要はないと思います。

いま私はスロバキアで日本語を教えていて、天野は名古屋で一人暮らしをしています。「妻が夫を陰で支える」という古来の「夫婦のかたち」とはかけ離れています。お互いが元気でいればそれで十分なのです。

（聞き手・田玉恵美）